

## 多様性をめざした精神看護学実習 - 訪問看護実習の意義 -

A consideration of visiting nursing in psychiatric nursing practice

大賀 淳子 Junko Oga, RN.

大分県立看護科学大学 専門看護学講座 精神看護学 Oita University of Nursing and Health Sciences

2003年1月10日投稿, 2003年1月22日受理

### 要旨

大分県立看護科学大学における精神看護学実習では、病棟実習だけではなく、外来、デイケア、訪問看護の場における実習を取り入れている。このうち訪問看護の実習では、学生が一人ずつ実習病院の訪問看護師に同行し、社会で生活している精神障害者の様子や看護の実際を見学し、病院の行っている訪問看護の意義について考えることとしている。本稿では、訪問看護実習後のレポートの分析やカンファレンスでの学生の様子をもとに、精神看護学実習における訪問看護実習の効果や改善点などを検討した。多くの学生は、訪問看護実習で印象深かった内容として「ケアの内容」をあげ、とくにコミュニケーションのあり方やエンパワメントに注目していた。一方、実習目標としてあげた家族への援助、他職種との連携、地域への働きかけなどに関して関心を持った学生はきわめて少数であった。今後、訪問看護実習をより効果的に行うための課題は、事前指導の充実、カンファレンスにおける指導の工夫、地域看護学実習と関連づけた指導などである。

### Abstract

We conduct psychiatric nursing practice not only in the ward but also at outpatient, day-care, and visit nursing sites at the Oita University of Nursing and Health Sciences. During the practice for visit nursing, students visit a user's home with a visiting nurse of the practice hospital one by one, in order to study the user's appearance and the actuality of nursing, and to think about the contents and meaning of visit nursing. In this paper, we examined the meaning and the problems associated with visit nursing practice in our psychiatric nursing practice based on students' appearance during conferences and an analysis of the students' reports after visits. The "Content of caring" made a deep impression on a lot of students, and many especially paid attention to ways of communication and empowerment. On the other hand, the impressions of giving help to the family, joint cooperation with other occupations, and appeals to the region were of an extremely small number. In order to make the visit nursing practice more effective in the future, we should enhance guidance beforehand, devise methods of guidance during conferences, and give guidance concerning regional nursing practice.

### キーワード

精神看護学実習、訪問看護、看護実習、看護教育

### Key words

psychiatric nursing practice, visiting nursing, nursing practice, nursing education

### 1. はじめに

精神医療が、入院中心の医療から地域で生活することを重視する医療へ移行している今日、看護教育において地域で暮らす精神障害者への理解を深め、援助の方法を考える教育のあり方を確立していくことは重要な課題である。

このような視点にたち、本学の精神看護学実習は病棟実習だけではなく、外来、デイケア、訪問看護の場における実習を経験することにより、受診から社会復帰にいたるケアの流れを学生が理解できるように工

夫している。とくに時間的には短いが訪問看護実習を取り入れることにより、精神障害者の社会復帰に関するさまざまな問題点を理解し、看護職者としての理解が深まる教育の効果を期待している。

そこで、本稿では学生のレポートの分析をとおして把握した、精神看護学実習における訪問看護実習の意義と学習効果、今後の課題、改善点などを紹介し、大学教育における多様性をもった精神看護学実習のあり方を考える際の参考になればと考える。

## 2. 本学における精神看護学実習の概要

本学では看護学実習を図1に示す5段階に分けて実施しており、精神看護学実習は第4段階の専門看護学実習に位置づけている。第4段階の実習は3年次の10月から12月の12週間、成人・老人看護学、母性看護学、小児看護学、精神看護学の4領域の実習を組み合わせ、4名の学生を1グループとしてローテーションを組んで行われる。

精神看護学実習は、大学から約15kmの距離にある単科の精神科病院(130床、民間)において10~14名の学生が1回あたり2週間の実習を行う。実習の目的は、精神的健康問題のある人を理解し、対象者の状況に応じた看護を行うために必要な知識・技術・態度を養うことである。また、対象者の回復・自立を援助するために実習施設で行われているさまざまなアプローチについて学ぶとともに、実習を通して自己洞察を深める態度を養うことも目的としている。このような目的を達成するために、病棟実習だけではなく、外来、デイケア、訪問看護の場においても実習を行うことにした。外来実習は半日、デイケアおよび訪問看護実習はそれぞれ1日で、残りの5~6日を病棟実習にあてている。実習期間中は毎日、学生と教員によるカンファレンスを行い、学生がその都度テーマを決めて自由に話し合う形式で、その日の互いの学習内容を共有し、深めることや相互に支え合う経験を持つことをカンファレンスの目標としている。

## 3. 訪問看護実習の意義と経過

### (1) 訪問看護実習のねらい

訪問看護の場における実習は、2週間の実習期間中の1日をあて、3名の訪問看護師に学生が1人ずつ

いて実習を行う。本学では訪問看護の実習のねらいを次の5点においている。

- i) 生活者としての精神障害者を理解する
- ii) 疾病が生活全般に及ぼす影響を知る
- iii) 家族への援助について考える
- iv) 他職種との連携や社会資源の活用について考える
- v) 受診から社会復帰にいたるケアの流れを理解する

### (2) 訪問看護実習のすすめ方

学生は実習前日に訪問予定者のカルテを閲覧し、訪問予定ケースの概要を事前に把握する。実習当日、学生は病院の訪問看護師の運転する車に同乗し、あらかじめスタッフを通じて了解を得ている利用者の家庭や施設を訪問する。訪問先では利用者の様子や看護の実際を見学し、病院の行っている訪問看護の意義等について考える。なお、利用者の了解が直前になって得られずに、車中または別の場所で待機するというケースも2年間の間にはあった。

学生は実習病院へ戻った後、カンファレンスで訪問看護実習の報告をし、各自が興味を持ったテーマを提案し、これについて学生同士で話し合っただけでなく、担当教員と臨床指導者が目を通し、以後の学生指導にフィードバックすることを目的としている。

### (3) 訪問看護実習の効果、問題点など(学生のレポートの分析を通して)

平成12年度(72名)および13年度(78名)に訪問看護の実習を行った全員(計150名)のレポートを対象とし、学生が「印象に残ったこと」「学べたこと」

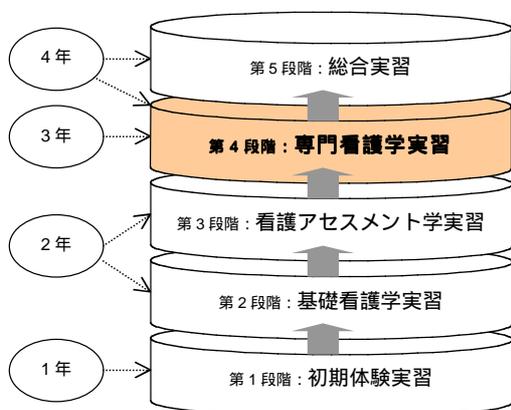


図1 看護学実習の流れ

表1 学生がレポートで述べた訪問看護の印象のカテゴリ・サブカテゴリー一覧

カテゴリ	サブカテゴリー
a. ケアの内容に関すること (84)	i. コミュニケーションのありかた (28)
	ii. エンパワメント (23)
	iii. 家族への援助 (12)
	iv. 他職種との連携 (5)
	v. 地域への働きかけ (3)
	vi. 疾病管理 (2)
	vii. その他 (11)
b. 訪問看護のイメージ、意義、やりがい (47)	
c. 地域で暮らす精神障害者のイメージ (44)	
d. 自分自身について考える機会 (24)	
e. 利用者との信頼関係 (22)	
f. 学生の訪問が利用者にも与える影響 (6)	
g. その他 (2)	

表2 各カテゴリにおける主なキーセンテンス

カテゴリ	【サブカテゴリ】	主なキーセンテンス
ケアの内容に関する こと	<b>【コミュニケーションのありかた】</b> 何気ない会話の中に、相手の思いを引き出すような技がある 傾聴や受容といった道具を使わない看護の難しさを感じた <b>【エンパワメント】</b> 生きがいを見つけたり、地域で暮らすために必要な援助をしていた 利用者自身が前向きな考えを見出すことで回復へ向かっていける。それを導いているのが看護 <b>【家族への援助】</b> 家族は1週間の間いろいろなことを考えながら、看護師が来るのをを待っている 家族の受け止め方や変化が、本人に様々な影響を与えている <b>【他職種との連携】</b> 社会復帰が大きな壁。多面的なアプローチや各種機関、職種との連携が大切であることを痛感した 緊急時、保健所と連絡をとって素早い対応をしていた <b>【地域への働きかけ】</b> 地域との交流を図ることは、利用者にとってすごく不安であり、それを支援する役割も担っている 精神障害者やその家族が遠慮なく暮らせるような地域作りが必要だと思った <b>【疾病管理】</b> 睡眠をとってもらふこと、薬をのんでもらふことの大変さを感じた 受診を拒む、服薬管理ができないなどのケースを見て、なぜ精神科に訪問看護が必要なのかがわかった	
訪問看護のイメージ、意義、やりがい		自分の判断で自由に動ける分、責任の重い仕事だと思った 今までは「退院後のフォロー」くらいの位置付けとしか捉えていなかったが、同行してみてもその意義の大きさに圧倒された
地域で暮らす精神障害者のイメージ		精神障害者はこんなにも自分の身近に存在しているのだと実感 地域で生活することがどれだけ大きな意味を持ち、大切なことかがわかった
自分自身について考える機会		車中での看護師さんとの会話は、すごく頭を使って疲れたが、たくさんのことを気づかせてくれた 看護師さんに自分のことをペラペラと喋ってしまった。自分を見つめなおす時間だった
利用者と看護者の信頼関係		利用者と看護師との間には「安心」な雰囲気が流れていた 今まで見てきた患者 - 看護者関係とは明らかに異なっていた
学生の訪問が利用者 に与える影響		初対面の学生を受け入れてくれて、学生がいるところで不安や困りごとを相談できるということは苦痛だと思う。しかし、健康的な部分が多くなってきたとも解釈できるのだろうか 言葉では学生を受け入れていても本心はそうでないことを看護師さんが察し、自分はその場を離れた。言葉は必ずしも本音ではないということを実感した

として表現した文章をキーセンテンスとして抽出し、学生の学びなどについて分析した。全てのキーセンテンスの中から類似するものをカテゴリ化し、ネーミングした。この作業は、本実習に関わった複数の教員によって行った。一人のレポートの中に複数のキーセンテンスが含まれる場合があるので、学生数よりもキーセンテンス数のほうが多く、キーセンテンス数は229（平成12年度101、平成13年度128）であった。これらのカテゴリ・サブカテゴリ一覧を表1に、また主な

キーセンテンスを表2に示した。各カテゴリおよびサブカテゴリの出現頻度（図2）をもとに、過去2年間の訪問看護実習の効果や問題点などについて以下に紹介する。

印象深かった内容として「ケアの内容」をあげた学生が最も多かった（36%）。その内訳を見ると、コミュニケーションのあり方（患者 - 看護者関係）やエンパワメントに関する感想が過半数を占めた。看護者と利用者との間に繰り広げられる言語的、非言語的コ

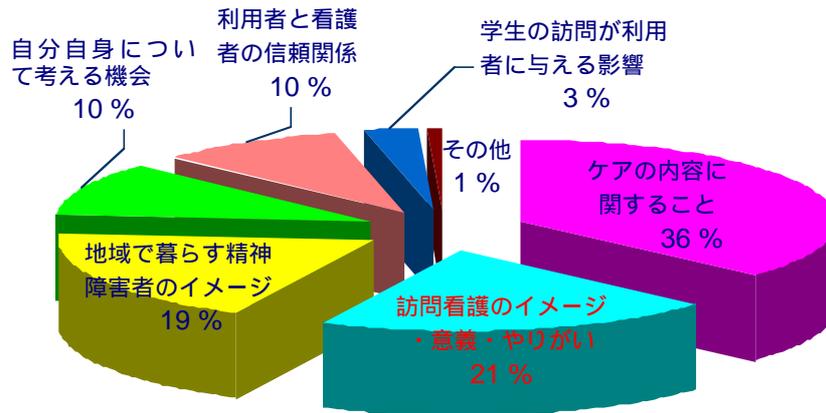


図2 各カテゴリ別出現頻度

コミュニケーションに多くの学生が興味を持ち、また何を対象者の目標において援助しているのか、に対して学生の関心が集中していることがわかる。一方、家族への援助、他職種との連携、地域への働きかけといった訪問看護の実習を通して是非学んで欲しいと我々が期待していた感想はきわめて少数であった。その理由としては、病院の訪問看護以外の社会資源を利用しているケースの数が少ないこと、他の社会資源を利用しているケースでも学生が訪問した際にその話題について触れられなかったことなどが考えられる。また、該当するケースに出会ったにもかかわらず学生の印象に残っていないのは、学生の訪問看護に関する知識不足により学習の機会を見逃してしまったものと考えられる。

「ケアの内容に関すること」について多かったのが、「訪問看護のイメージ、意義、やりがい」に関するものであった(21%)。訪問看護の意義、やりがいについて病棟看護と比較したものや、スタッフに求められる資質に関するものなど、学生自身の将来の職業選択のための判断基準として役立てようという姿勢がうかがえる。

また、地域で暮らす精神障害者のイメージについて述べた感想は約2割(19%)であった。多くの学生は実習以前には地域で暮らす精神障害者に身近に接した経験を持たず、そのイメージは極めて貧困である。したがって、訪問看護の実習を通して地域で暮らす精神障害者と直に接することそのものが貴重な体験である。毎日のカンファレンスではどの学生も、訪問先で出会ったケースの印象を興奮気味に一生懸命学生の仲間に伝えようとしていた。学生が述べる感想は、同じ

疾患でも個人差が極めて大きいこと、自分の身近にある精神障害者の存在を実感したこと、社会の中での生活のしづらさを実感したこと、一生懸命生活している姿に尊敬の念を感じたこと、など実に様々で、学生の視点の多様さが伺えた。また、一人の発表に他の学生が耳を傾け、活発に質問する光景が毎日のようにみられ、訪問看護の実習効果をあげるためにカンファレンスが極めて効果的であることを確認した。

看護師との車中での会話が自分に大きな影響を与えたという感想が約1割あった(11%)。

実習施設の看護師と1対1で向かい合い、じっくりと語り合う機会を設けることは病棟・外来・デイケア実習の中では時間的に困難である。しかし、訪問看護実習では、往復の車中がその絶好の機会となる。看護師さんの経験や看護観を伺ったり、学生の看護観を尋ねられたりする中で、今まで気づかなかった自分の傾向を発見する学生もいる。また、新たな視点を獲得、翌日からの病棟実習に活かすことができそうだという感想もあった。このような効果は、実習前には予想していなかったことであり、スタッフの方々に感謝しているところである。先輩看護師とじっくり語りあう場を求める学生のニーズを再確認した。

#### (4) 改善点

学生のレポートなどからの結果をふまえ、現行の訪問看護実習の改善点について考えてみた。

まず、訪問看護実習に出る前の事前指導を充実させ、学生の実習への準備性を高めておくことが必要である。具体的には、次のような視点を持って訪問看護場面を見るようあらかじめ指導する。

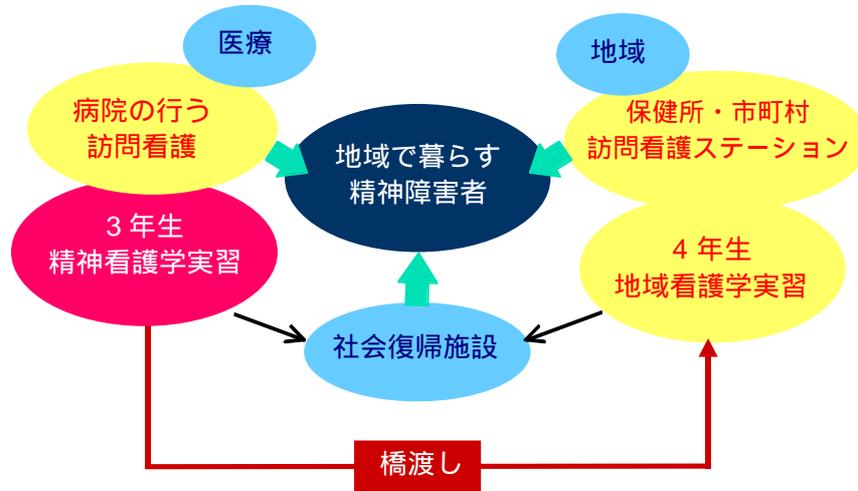


図3 地域看護学実習との関連

- i) 対象者は今、どういうステージにあるか
- ii) どのような困り事がかかえているか
- iii) 困り事の解決のために、病院の訪問看護はどのような援助を行っているか
- iv) 他にどのような社会資源を活用しているか

次に、カンファレンスの有効な活用があげられる。カンファレンスでは教員が適切に介入していくつかのケースをとりあげてディスカッションを行い、包括的な地域支援システムについて関心を持つようにしむけることで、病院の行う訪問看護の意義をより深く理解することができる。ディスカッションの対象として積極的に取り上げたいケースの特徴として、次のようなものが考えられる。

- i) 病院からの訪問看護に加え、他の社会資源の活用が行われ、社会復帰が可能となったケース
- ii) 精神障害者への支援システムが確立されている先進的な地域に住む利用者への訪問ケース
- iii) 他の社会資源の活用や連携がスムーズに行われ、利用者の希望通りの生活ができていないケース

さらに、4年次に行われる地域看護学実習と関連づける指導も重要である。学生は地域看護学実習の保健所、市町村および訪問看護ステーションでの実習において、地域で暮らす精神障害者への援助について学習する機会を再び得ることになる(図3)。3年次の精神看護学実習での学習をふまえて地域看護学実習に課題を持って臨み、さらに深まりのある学習が可能となるよう配慮していきたい。カンファレンスなどの機会

を通じて、次年度の地域看護学実習を視野に入れ、訪問看護実習の学習成果と課題を各学生が整理できるような助言も必要と思われる。

#### 4. おわりに

精神看護学実習に訪問看護の実習を取り入れることは、学生が地域で暮らす精神障害者に対する理解を深め、支援のありかたについて考えるために有効な方法であると思われる。今後は上記の点を改善しつつ、実習を見直し、より効果的な実習方法を創造していきたい。

#### 著者連絡先

〒 870-1201  
 大分県野津原町廻栖野 2944-9  
 大分県立看護科学大学 精神看護学研究室  
 大賀 淳子  
 oga@oita-nhs.ac.jp